

キリスト教学の現場から (1)

— 受講生の声を聞く —

梶 原 忠 裕
塩 野 和 夫

はじめに

2016年度から西南学院大学のキリスト教学Ⅰ・Ⅱを担当している。教える立場にありながら、「受講生の声（感想，意見，質問，要望）」から，さまざまな気づきの機会を与えられてきた。

そのような気づきの中から，受講生と講師との間に生じている基本的な認識のずれについて考察する。この事実は大学にとどまらず，日本社会の中でキリスト教がどのように捉えられており，どのような認識のずれが生じているのかを示唆している可能性がある。

そのために，まず授業（キリスト教学Ⅰ）の進め方を説明し，2018年度の第1回授業および第2回授業に対する「受講生の声」を紹介する。その中から注目したポイントについて，どのように対応したかを説明する。最後に，受講生と講師との間に基本的な認識のずれが生じた原因について検討する。

塩野和夫教授（西南学院大学国際文化学部）には，授業の進め方や論文執筆について指導いただいた。また，日本における宗教意識については湯川洋久氏に，中国のキリスト教事情については松谷曄介牧師（筑紫教会）に教示いただいた。

1. 授業の進め方

キリスト教学Ⅰの共通テーマは「聖書」となっている。キリスト教学Ⅰは1年前期の必修であるため、受講生の多くは高校を卒業したばかりである。

授業は、聖書を読み進めながら、キリスト教への理解を通して、受講生一人一人の人生における価値観・世界観形成の一助となることを目指している。メインテキストに『NEW TESTAMENT 新約聖書 (NKJ/新共同訳)』（日本国際ギデオン協会）、サブテキストに『バイブル・プラス カラー資料』（日本聖書協会）を使用している。2018年度は「マタイによる福音書」を通して、現代の私たちに語りかけている聖書のメッセージを読み解くことを心掛けた（表1）。

まず初回のガイダンスで受講生全員に授業担当を指定し（全員が2回担当者となるようにしている）、担当者には最前列に着席してもらう。各回の授業は、概ね以下のように進めている。

1. 講義プリントの配布

授業の最初に、講義プリント（A3両面または片面）、授業感想文用紙（A5）、チャペル週報『使者』を配布する。講義プリントには授業解説項目、参考資料、「みんなの意見まとめ」（後述）を掲載している。

なお、チャペル出席は義務化していないが、チャペル・レポート提出者には若干の加点をする旨をガイダンスで伝えている。そのため『使者』配布時にチャペルのアナウンスをした。

2. 前回授業の補足解説

前回の授業感想文をもとに作成した「みんなの意見まとめ」を使いつつ、補足解説を行う。

3. テキスト輪読

担当者に該当聖書箇所を輪読してもらう。また、関連聖書箇所やサブテキスト、参考資料を輪読してもらう。

表 1 2018年度キリスト教学 I の講義計画

回	テーマ	聖書テキスト	ハイブル・プラス参照箇所
第1回	オリエンテーション		98. 聖書について～104. 新約聖書(2)
第2回	イエスの系図	マタイによる福音書 1 : 1-17	12. 奴隷となったヘブライ人～14. 奴隷からの解放 26. ダビデ～28. ソロモン 40. 捕囚と帰還
第3回	イエスの誕生	マタイによる福音書 1 : 18-25 マタイによる福音書 2 : 1-12	120. 芸術における聖書(2) 68. 新約時代のエルサレム 72. ハツレヘムとヨルダン
第4回	イエスの伝道活動(1) 伝道の開始	マタイによる福音書 4 : 1-11 マタイによる福音書 4 : 12-17	70. ナザレ 72. ハツレヘムとヨルダン 74. カファルナウムとガリラヤ湖
第5回	イエスの伝道活動(2) 山上の説教	マタイによる福音書 5 : 1-2 マタイによる福音書 5 : 3-12	74. カファルナウムとガリラヤ湖
第6回	イエスの伝道活動(3) 病の癒しと罪の赦し	マタイによる福音書 9 : 1-8	56. ヘブライ人の住居 66. ファリサイ派、サドカイ派、律法学者
第7回	イエスの伝道活動(4) 使徒の派遣	マタイによる福音書 9 : 35-38 マタイによる福音書 10 : 1-4	62. シナゴーク(会堂)
第8回	イエスの伝道活動(5) 天の国のたとえ(1)	マタイによる福音書 13 : 1-9 マタイによる福音書 13 : 18-23	48. ユダヤの曆 48. ユダヤの曆 50. ユダヤ人の労働 52. 貨幣と度量衡
第9回	イエスの伝道活動(6) 天の国のたとえ(2)	マタイによる福音書 20 : 1-16	48. ユダヤの曆 50. ユダヤ人の労働 52. 貨幣と度量衡
第10回	イエスの受難(1) 神殿での論争	マタイによる福音書 21 : 1-11 マタイによる福音書 21 : 12-17	48. ユダヤの曆 60. ヘロデの神殿 64. 祭司とレビ人～65. いけにえ
第11回	イエスの受難(2) 十字架への準備	マタイによる福音書 26 : 1-5 マタイによる福音書 26 : 6-13 マタイによる福音書 26 : 14-16	48. ユダヤの曆 52. 貨幣と度量衡
第12回	イエスの受難(3) 弟子の裏切り	マタイによる福音書 26 : 47-56 マタイによる福音書 26 : 69-75	82. ユダヤとローマの裁判 88. ペトロ
第13回	イエスの受難(4) 十字架での死	マタイによる福音書 27 : 32-44 マタイによる福音書 27 : 45-56	82. ユダヤとローマの裁判 84. 十字架刑
第14回	イエスの復活	マタイによる福音書 27 : 57-61 マタイによる福音書 28 : 1-10	86. ユダヤ人の埋葬 48. ユダヤの曆 90. ハウロと旅
第15回	まとめ	マタイによる福音書 28 : 16-20	

4. テキスト解説

担当者に聖書箇所についての意見や感想を聞く（実際には講師から担当者に質問を投げかけて意見や感想を聞くことも多い）。その後、当時の状況やキリスト教の考え方を解説する。その際には、サブテキストを併用し、参考文献や Power Point による画像資料も紹介して、多面的に理解できるように心掛けている。

5. 授業感想文提出

授業の最後10分間程度で、受講者全員に簡単な授業感想文（授業内容に関する感想、意見、質問、要望）を自由に記述して提出してもらう。

このような授業形式を採用しているのは、塩野和夫教授の指導方針によるところが大きい。2015年度後期のキリスト教学Ⅱの授業を見学させていただき、キリスト教学の進め方についての参考とした。塩野教授は、キリスト教学について「学生の人格形成に寄与することを目的とする」「学生と教師の共同作品¹⁾である」という基本的な立場を表明している。このような立場を継承したキリスト教学を行っていきたいと思っている。

2. 「みんなの意見まとめ」実例

授業の最後には受講生全員に授業感想文を提出してもらっている。これが出席確認にもなると伝えているので、受講生は必ず提出してくれている。

2017～2018年度の授業感想文は全て Word ファイルに入力した。それを授業内容に即した項目ごとに分類し、似たコメント内容（感想、意見、質問、要望）をまとめ、取捨選択・文章校正をして、「みんなの意見まとめ」と題したプリント（A4片面1～2枚分）を作成し、次回授業の最初に配布してきた。

「みんなの意見まとめ」は、授業内容のまとめだけでなく、受講生同士の意

1) 塩野和夫『継承されるキリスト教 — 西南学院創立百周年に寄せて』317-318 頁

見交換の場としての提供を目的としている。そのため、コメントに偏りが少なくなるように意識して作成した。一方、コメントをまとめると、似たような内容がどれくらいあるのかわからない。そこで、似た内容が受講生の10%を超えるコメントには◎を付して、優先的に掲載した。また、注意を要するコメントには波線を付し、授業冒頭で補足解説を行った（後述）。

ここで、2018年度の第1回および第2回授業に対する「みんなの意見まとめ」の内容を紹介する。

第1回授業：オリエンテーション

1.1. キリスト教（学）について

- ◎キリスト教について学ぶのは初めて。全然何もわからない状態で不安。聞いたことのない言葉がたくさん出てきて難しそう。
- ◎高校の世界史や倫理でキリスト教について少し学んだので、思い出しながら勉強していきたい。
- ◎自分達の回りにはキリスト教文化がたくさんあると思う。キリスト教への理解や興味を通して、教養を深めて視野を広げ、これからの人生に役立てていきたい。
- キリスト教と聞いて思い浮かべるのはギリシア神話。
- 将来は留学を考えており、キリスト教は世界で広く信仰されている宗教の一つなので、キリスト教圏の人と関わる上での必要な知識を身につけたい。
仏教徒の多い日本やアジアだけでなく、世界中の人々の信条や生き方をより深く理解できるようになると思う。

1.2. 聖書について

- ◎2000年以上も前の写本が現存していることに驚きだった。よほど保存環境がよく、また数多くの写本が作られて、人が触れないような場所に保管されたものがあったということなのか。
- ◎2000年以上も前の写本の内容が、現在に至るまでほとんど変わっていないことに驚いた。印刷技術が発達する以前の時代に、手書きでしっかりと写して

きた昔の人の信仰の深さを感じた。

◎聖書には旧約聖書と新約聖書があり，書かれた年代や言語が違い，構成やテーマにも違いがあることがわかった。

◎旧約聖書も新約聖書も，多くの著者によって書かれた書物の集合体であることを知った。

• ばらばらの文書や手紙を，誰がどのようにして「聖書」としてまとめたのか。

◎キリスト教もイスラム教もユダヤ教から派生して生まれたことは知っていたが，キリスト教と対立していると思われるイスラム教も旧約聖書を使うことがあると初めて知った。

• 旧約聖書も新約聖書も「救い」をテーマとしており，これらの聖書ができた当時は苦しいことがあって，救いを求める人々がいたのではないか。

◎「イエス・キリスト」は名・姓と思っていたので，「キリスト」がギリシア語で「救い主」という意味であることに驚いた。

1.3. 授業についての質問・要望，その他

• 「アダムとイヴ」や「ノアの箱舟」など旧約聖書の物語に興味があるのだが，授業では新約聖書の内容しか扱わないのか。

• テストの論述は何字くらいか。どのような問題になるのか。ノートは準備した方がよいか。

• チャブルレポートはパソコンで作成しても大丈夫か。要約と感想の割合はどれくらいがいいか。

第2回授業：イエスの系図

2.1. 福音書について

◎福音書にイエスの人物像や幼少～青年期の記述がほとんどないというのは意外に感じた。

◎絵画などで今まで見てきたイエスの容姿は想像だと初めて知った。

• 福音書がイエスの死の数十年後にまとめられたことを初めて知った。また，福音書の主な内容はイエスの約3年間の公的活動と受難（十字架での死）～

復活であることがわかった。

- イエスが生きた時代に「キリスト教」は存在しなかったという当たり前の事実に初めて気付いた。ユダヤ教が普及している地域で活動していたイエスは、ユダヤ教を信仰していたのか。
- ◎ 福音書の著者はどのような人物で、誰に向けて書かれたのか、また当時のユダヤの文化や社会の状況などを、文章から読み取ることができるのはとても興味深い。

2.2. イエス・キリストの系図について

- ◎ イエスの系図は、読みづらいカタカナがたくさん並んでいて、何が書いてあるのか全く理解できなかった。ほとんど聞いたことのない名前ばかりで、これを全部覚えるとなると正直きつい。
- ◎ イエスの系図にはほぼ男性の名前しか書かれておらず、2000年前のユダヤが男系社会だったことを知った。いつの時代、どこの地域でも、男性が優遇されるのはなぜなのか。
- 昔のユダヤの人々が系図を大切にしていた今でもそれが残っているのはすごい。長い系図から、出身や血統の正統性を証明したり、民族の歴史も読みとることもできることを学んだ。
- ◎ イエスの系図が14代ごとに区切られているのは、14がダビデ王を意味する数字で、イエスがダビデ王の子孫であることを強調しているのだとわかった。

2.3. イエス・キリスト前史について

- ◎ イエス以前のイスラエル民族の歴史的背景を学んだ。新約聖書を読むためには旧約聖書の知識が必要なのと思った。
- ♪ 「アブラハムには7人の子」と歌った記憶があるが、「信仰の父」アブラハムの歌か。
- ヤコブが神と格闘したことが由来となって、イスラエル（神と戦う）になったのは面白い。
- イスラエル民族が12（または13）部族連合であることを知らなかった。
- ◎ イスラエル民族がエジプトで約450年間も奴隷だったことに驚いた。生まれ

た時から死ぬ時まで奴隷として虐げられる人生しか送れなかった人達のことを思うと心が痛む。

2.4. 授業についての質問・要望、その他

- 自然災害の怖さは実感がわく。被災者支援について具体的に自分に何ができるのか知りたい。
- ◎ギリシア神話は多神教で、唯一神教のキリスト教とは全く関係ないということを知った。
- ◎アジアの国々の宗教は多様であることがわかり、アジアの宗教分布に興味を持った。

3. 受講生の声を聞く

3.1. 大学入学までのキリスト教に関する経験

第1回授業（オリエンテーション）は、授業の進め方や注意事項の説明、聖書についての大まかな概説に留めた。またキリスト教学は大学の授業であって、「宗教勧誘を目的としていない」ことを明言している。

授業感想文を見ると、キリスト教や聖書について「ほとんど知らない」「学ぶのは初めて」、または「高校の世界史や倫理で少し学んだ程度」と書いた受講生が全体の70%程度いる²⁾（図1）。授業感想文はアンケートと違って自由記述なので、大学入学までのキリスト教に関する経験の有無について「記述なし」が15%以上いた。それでも80%以上の受講生がキリスト教に関する何らかの経験についてコメントしている。

キリスト教に初めて触れる受講生の多くは、神の存在を信じているかどうかに関わらず、キリスト教学という授業に対してそれほど拒否感がない。むしろ大半が「新しい知識を学べる」期待を好意的に書いている。将来は海外活動・海外交流を考えている受講生も少なからずいた。そのために「必要な教養や知

2) 「幼稚園がキリスト教系」だが「それ以来キリスト教に触れていない」という受講生は除く。

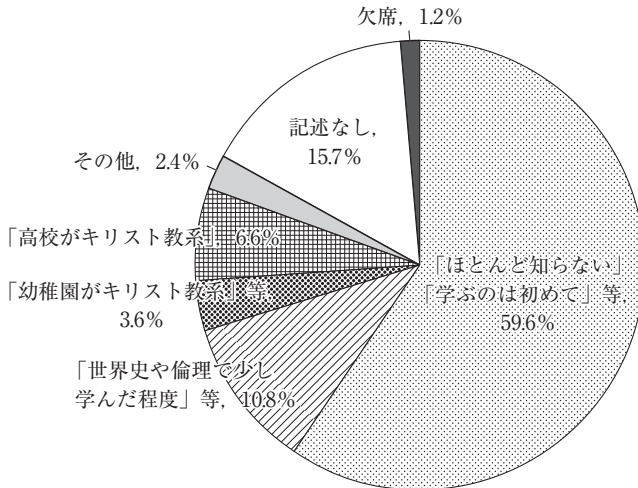


図1 大学入学までのキリスト教に関する経験

2018年度キリスト教学Ⅰ受講生の第1回授業感想文（3クラス166名分）をもとに作成した。なお、「もともとキリスト教に興味がある」等のコメントは「その他」とした。

識を身につけたい」「世界の人々の価値観を理解したい」という希望も書いている。ミッション・スクールとしての西南学院大学が、キリスト教教育において受講生から信頼されている証左ではないだろうか。

チャペルのアナウンスも好評で、「チャペルの講話内容に興味を持った」「チャペルに行こうと思う」というコメントを目にすることが何回もあった。チャペルに対する関心が薄く、配布されたチャペル週報『使者』を見ていなくても、アナウンスすることでチャペルに興味を持つ受講生は意外に多い。

2018年度の受講生は、1990～2000年代に比べて、キリスト教を含む宗教全般に対して寛容である。これまでキリスト教学Ⅰ・Ⅱを担当した3年間、のべ800名以上の受講生のうち、第1回授業の時からキリスト教に対して拒否感を表明した受講生は数名である。

このような状況は逆に、カルト的な宗教活動に対して無防備な受講生が多い可能性もあり、責任を感じさせられる。

なお、「幼稚園がキリスト教系」であった受講生の第2回授業感想文の中に、♪「アブラハムには7人の子」について言及があった。1979年に子門真人が歌って流行した童謡「アブラハムの子」である。キリスト教系幼稚園ではいまだに遊戯歌として使われているのであろうか。この童謡に言及する受講生が毎年1～2名はいる。20歳前後の受講生の記憶に残り続けているという意味では、幼少期の教育がいかに重要であるかを物語っている。ちなみに、2016年度に最初にこのコメントを見た時には、創世記を読み返して、アブラハムにはイシュマエルとイサクの他に、後妻ケトラとの間に6人の子供がいたことを確認した（創世記25：1～2）。追放されたイシュマエルを除けば「アブラハムには7人の子」である。

3.2. キリスト教に対するさまざまな誤解

授業感想文から、受講生がどれだけ授業内容を理解できたかを推し量ることができ、授業のあり方について反省させられることが多々ある。特に第1回および第2回授業感想文は、まだ聖書の内容に踏み込んでいない。そのために大学入学までのキリスト教理解がよく見える。その中には、看過できない基本的な誤解が散見される。

(1) キリスト教と西洋文化に対する誤解

キリスト教を「学ぶのは初めて」という受講生の第1回授業感想文の中に、「キリスト教と聞いて思い浮かべるのはギリシア神話」というコメントがあった。ただ1名のコメントではあったが「みんなの意見まとめ」で取り上げた。その上で第2回授業の冒頭で、西洋文化の2大源流としてのユダヤ・キリスト教（唯一神教）とギリシア・ローマ文化（多神教）について概説した。

すると第2回授業感想文では、キリスト教とギリシア神話の違いについて「知らなかった」「初めて知った」といったコメントが受講生全体の10%以上あった。たまたま1名の受講生がコメントしてくれたおかげで、実は全体の1割を超える受講生がキリスト教とギリシア神話を混同していたことがあぶり出

された。このような状況は想定の外であったので、1名のコメントがなかったら全く見過ごされていたはずである。そのままであったら、キリスト教学の受講生の1割程度は、キリスト教とギリシア神話の区別もわかっていなかったに違いない。

聖書にはギリシア神話がかかれていいると思ひ込んだままで、「大学でキリスト教を勉強した」受講生に注意を促すことができたのは幸いであった。

(2) 日本とアジアの宗教事情に対する誤解

「世界の人々の価値観を理解したい」と希望している受講生の第1回授業感想文の中に、「仏教徒の多い日本やアジア」という表現があった。これもただ1名のコメントではあったが、「みんなの意見まとめ」で取り上げた。というのも、2016～2017年度の授業感想文でも「仏教国日本」「欧米はキリスト教だがアジアは仏教」といった表現が散見されていたためである。そこで第2回授業で、日本とアジアの宗教事情について以下のように概説した。

日本では、特に葬儀の際に宗教を意識することが多いのではないかと思う。仏教式で葬儀を行い、寺の墓地に埋葬されることも多いだろう。その意味では「仏教徒が多い日本」もあながち誤りとは言えないだろう。しかし、日本人の日常的な感覚における宗教意識で最も多いのは、明確な無神論という意識でもない「無宗教（無回答）」ではないだろうか（図2）。その一方で、元旦に神社が初詣の参拝者でごった返す風景を見るにつけて、日本人の宗教意識の実体について本来はもっと議論を深めておく必要があるだろう（「自分は宗教的ではないが、スピリチュアルなことには関心がある」と自らを定義する人々を指す NRBS (Not Religious But Spiritual)³⁾という概念も近年注目されてきている）。

受講生がどこまでを「アジア」として認識しているのかにもよるが、西

3) 湯川洋久「日本における Not Religious But Spiritual (NRBS) に関するサーベイ—日本語文献を中心として—」119頁

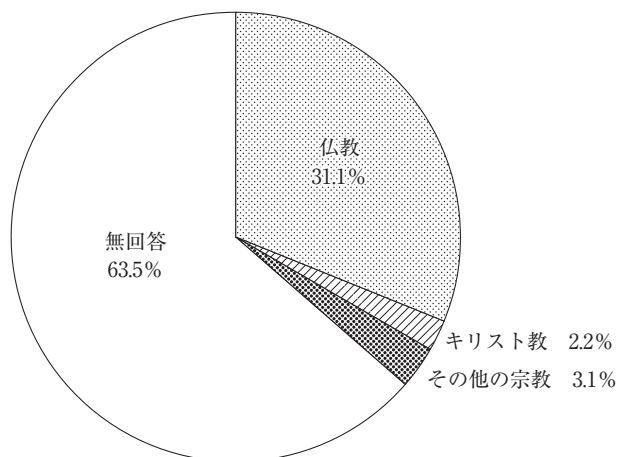


図2 日本における宗教意識

電通総研・日本リサーチセンター（編）『世界主要国価値観データブック』（2008）のデータ（日本全国の18歳以上の男女1,096人に対する面接調査結果）をもとに作成した。

問は「あなたは、現在、何か宗教をお持ちですか。次の中から1つだけあげてください。（1つだけ○印）。選択肢は「持っていない」「キリスト教（カトリック）」「キリスト教（プロテスタント）」「キリスト教（その他）」「ユダヤ教」「イスラム教」「ヒンズー教」「仏教」「その他の宗教」「無回答」。

選択肢ではキリスト教が「カトリック」「プロテスタント」「その他」の3つに分けられているが、本論では「キリスト教」でまとめた。またデータでは「ユダヤ教」が0.1%あったが、「その他の宗教」に含めた。なお、「持っていない」「イスラム教」「ヒンズー教」の選択者はいなかった。

アジアを除くとしても、アジアの宗教事情は複雑である（図3）。インドシナ半島を中心にして仏教人口の多い国（カンボジアやタイなど）も目立つが、仏教発祥の地とされるインドではむしろヒンズー教人口の方がはるかに多い。また、アジアには、イスラム教人口が圧倒的に多い国（インドネシアやバングラデシュなど）もあれば、キリスト教人口が圧倒的に多い国（フィリピンなど）もある。韓国でもキリスト教人口は日本と違ってそんなに少なくない。

共産主義国である中国では、現在キリスト教人口が増加傾向にあり、公認教会と非公認教会の信徒数をあわせると総人口の5%にあたる7000万人

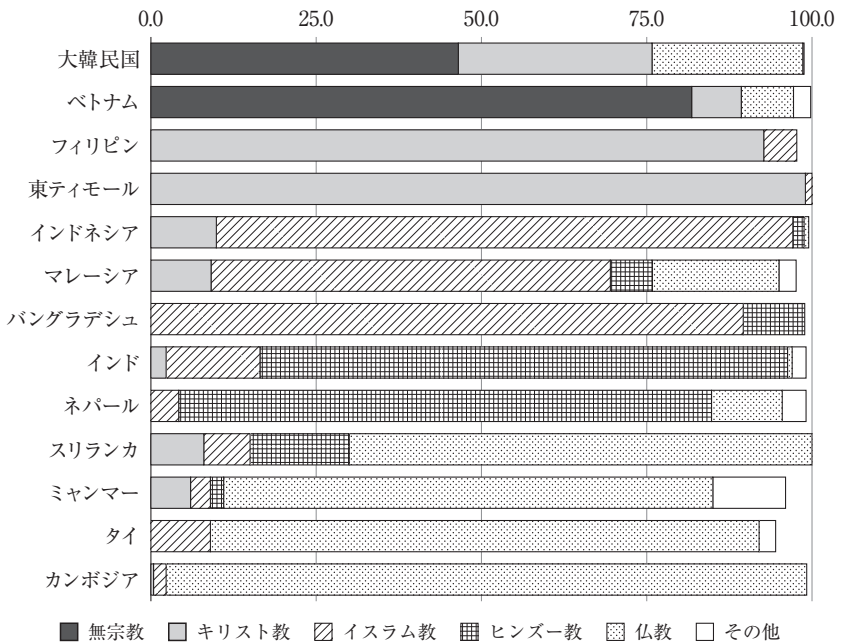


図3 主なアジア各国の宗教人口比（横軸は人口%）

二宮書店編集部（編）『データブック オブ・ザ・ワールド2017年版』（2017）のデータをもとに作成した。ただし、日本、西アジア諸国、統計データの詳細が不明な国、統計データ合計が90%未満の国、および人口（2016年）が100万人未満の国を除く。なお、各国のデータ年次は資料の関係から統一できていない。

近くになる⁴⁾。中国のキリスト教人口はすでに中国共産党員数を凌駕し、日本の総人口の半分に達する勢いである。最近の中国政府によるキリスト教会迫害のニュースを耳にすると、このような背景を知っていると大きく印象も変わるだろう。

第2回授業感想文では、アジアの宗教事情について「多様であることがわかった」「初めて知って興味を持った」といったコメントが受講生の15%程度

4) 松谷暉介「第八章 中華人民共和国におけるキリスト教——一九四九年から現在まで」214頁

あった。授業感想文は自由記述であるから、アジア（と日本）への認識を新たにした受講生は、実際にはもっと多かったはずである。「日本」を基準にして「アジア」を一括りにはできない現状を知っておいてほしいと思った。授業ではこれ以上は踏み込まなかった。しかし、これを機に、日本人の「無宗教」意識の形成過程や、アジア諸国の宗教人口の分布の歴史的背景などにまで考察を深めたいというコメントも見られた。

(3) 「神」に対する誤解

第2回授業は福音書の概説から始めて、「イエスの系図」をテーマにマタイによる福音書1章1-17節を担当者に輪読してもらった。そして、「イエスの系図」を手掛かりに、旧約聖書とイスラエル民族の歴史（イエス・キリスト前史）について概説した。受講生は試験が気になるので、カタカナ名前の羅列を覚えなければならないのかと心配になる。そのため、「試験に出さないの覚えなくてもよいが、アブラハムとダビデは授業で解説するので知っておくとよい」と伝えた。

この「イエスの系図」の説明に関して、2018年度の授業では注意を要した。以前（2016～2017年度）の授業感想文から、以下のような苦い経験をしてきたからである。

イエス・キリストは「神の子」であるという知識だけは持っているために、イエスの系図に出てくる登場人物の名前（アブラハムやダビデなど）が全て「神の名」であると勘違いしていた受講生がいた。その受講生にとって「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」（出エジプト3：6）とは、「アブラハムという名の神、イサクという名の神、ヤコブという名の神」と3人の神の名が列挙されていることになっていた。

サブテキストの『バイブル・プラス カラー資料』では、イエスの時代のエルサレム神殿を「ヘロデの神殿」と呼んでいる。これも受講生によっては「ヘロデという名の神を祀った神殿」となる。しかもイエスがその神

殿を「わたしの父の家」(ヨハネ2:16)と呼んでいることから、イエスの父親はヘロデという読み方をされたこともある。

日本語の助詞「の」には多義性があり、文脈によって判断するにしても、かなりの前知識を要求される。祖先霊を「神」と呼ぶ日本の多神教的な感覚のまま、キリスト教の聖書を読もうとすると、わけがわからなくなる。

その一方で、キリスト教の側にも「三位一体」という、多くの受講生にはイエスの位置付けが理解し難い側面がある。「三位一体」をキリスト教学Ⅱで扱うので、ここでは深入りせず、「キリスト教は基本的に唯一神教なので、天地万物を創造した唯一の神以外は、アブラハムやダビデなど、どんな偉人であっても人間を『神』とは呼ばない」とだけ説明しておいた。

(4) 聖書の舞台に関する誤解

第2回授業の「みんなの意見まとめ」の中に、「イエスが生きた時代に『キリスト教』は存在しなかったという当たり前の事実初めて気付いた」というコメントがある。授業の中で「福音書に記述されているイエスの活動の舞台は(基本的に)ユダヤ教」であることを強調したことによるのだろう。

2017年度の授業感想文には「イエス・キリストがユダヤ人であることすら知らなかった」という受講生もいた。金髪碧眼の「西洋人」イエス像を思い浮かべていたのであろうか。2018年度の授業感想文でも「絵画などで今まで見てきたイエスの容姿は想像だと初めて知った」受講生が10%程度いた。

2016~2017年度の授業感想文から、聖書にはキリスト教のことしか書かれていないと思い込んでいる受講生も複数人数いた。そのような受講生たちにとっては、福音書に登場するファリサイ派の律法主義も、エルサレム神殿の動物犠牲も、すべて「キリスト教」だった。そのため、現代のキリスト教であっても、「罪人」に不寛容で、罪のない動物を虐待する、前時代的な宗教であると受け取った受講生もいた。

講師にとって自明の知識が、受講生に共有されていなかったことを気付かさ

れた瞬間である。それ以降、福音書概説の重要ポイントとして、「福音書に記述されているイエスの活動の舞台は（基本的に）ユダヤ教」であることを、ことあるごとに強調するようにしている。それでもなお、第11回授業感想文で「キリスト教がユダヤ教から派生したものだ」と初めて知った」というコメントを目にした時には、まだまだ説明が不十分であったことを実感させられた。

おわりに — 大学教育の醍醐味

第1回および第2回授業の「みんなの意見まとめ」を通して、受講生と講師との間の基本的なキリスト教認識のずれについて考察した。受講生のキリスト教に対するさまざまな誤解が、講師の説明不足に起因していることは間違いない。しかしこれらの事例は些細なようで、日本社会の中でのキリスト教理解の障壁になっている可能性もある。

例示した4つの誤解は「異文化」への知識・関心の不足に端を発している。自分の周辺環境・情報だけで構築された「日本」を判断基準として、それ以外を全て「異文化」と一括りに捉えて切り離す思考に慣れている受講生も多い。「日本」文化の根底部分を（キリスト教的なものも含めて）多くの要素が複雑に絡み合いながら支えているという発想も必要ではないだろうか。

日本では、一部の宗教系学校を除けば、高校教育の中で宗教について学ぶ機会が圧倒的に少ない。日本人の多くは「宗教学」という授業を大学に入って初めて学ぶ。逆に言うと、「宗教学」を学ぶ機会が全くなかった人も少なからずいる。受講生の大半は、大学入学まで宗教的なものを意識することなく過ごしてきた。しかも高校の社会科学は、世界史、日本史、地理、現代社会、政治経済、倫理など細かく分けられた分野から選択する。そのために、選択分野以外については知識もなく関心も薄い。高校の世界史や美術などの教科書では、キリスト教を題材とした芸術作品も、ギリシア神話を題材とした芸術作品も掲載されている。しかし、それらの題材の背景を区別することなく「西洋（キリスト教）文化」と一括りにしている高校生も少なくない。

それまでの教育の中で、世界を「日本・アジア（仏教）」VS「西洋（キリスト教）」と単純化して認識する二項対立的思考に慣らされてきた受講生がいる。そうだとしたら「常識（思い込み）」に揺さぶりをかけるのが、まさに大学教育の醍醐味であろう。

と同時に、講師もキリスト教の基本的な部分を積極的に紹介してもよいのだと確信を得た。ともすれば、キリスト教の基本的な部分は自明の知識として「大学教育の中でやることではないのではないか」と説明を省いた授業を行ってきた。しかし、それではかえってキリスト教に対する誤解を残したままにってしまう。受講生の声を丹念に聞くことで、授業内容をどのように受け止めている（時には誤解している）のか、どこの部分で躓いているのか、どのような「常識（思い込み）」に捉われているのか、が見えてくる。講師も、受講生との認識のずれに気付かされ、授業の進め方やテキスト内容に対する「思い込み」に揺さぶりをかけられてきた。時には、講師がさらに勉強しなければならないこともある。

その意味で今回取り上げた事例に気付かせてくれたコメントだけでなく、全ての受講生の授業感想文は、講師にとって貴重な「天の声」である。これからも「受講生の声」に注意深く耳をかたむけて、「学生と教師の共同作品」としてのキリスト教学を構築していきたい。

参考文献

- 『NEW TESTAMENT 新約聖書（NKJ/新共同訳）』日本国際ゲデオン協会，1999年
『バイブル・プラス カラー資料』日本聖書協会，2014年
塩野和夫『継承されるキリスト教教育 — 西南学院創立百周年に寄せて』九州大学出版会，2014年
電通総研・日本リサーチセンター（編）『世界主要国価値観データブック』同友館，2008年
二宮書店編集部（編）『データブック オブ・ザ・ワールド 2017年版 — 世界各国要覧と最新統計』二宮書店，2017年
松谷暉介「第八章 中華人民共和国におけるキリスト教 — 一九四九年から現在まで」石川照子ほか『はじめての中国キリスト教史』（かんよう出版）191-220頁，2016年

湯川洋久「日本における Not Religious But Spiritual (NRBS) に関するサーベイー日本語文献を中心としてー」宮崎学園短期大学紀要第 11 号 119-126 頁, 2019 年